

和水町の菊水中3年生が10月の文化祭で、シェークスピア四大悲劇の一つ「オセロ」をアレンジした演劇を披露する。同町では2012年、当時中学3年だった男子生徒が自殺。生徒らは揺れ動く人間の心を描いた演目の練習を通して、相手の心情を考えて行動することや自分を表現する大切さを学んでいる。

人間の心 演劇で学ぶ

和水町・菊水中生

絶たれた生徒の命 風化させない

ベネチアの將軍オセロが、自身を嫌う部下の策略で、妻や腹心の部下など周囲の人間に不信感を抱き、翻弄される物語。敵味方が目まぐるしく入れ替わる内容で、ボードゲームの名前の由来となった。

6日の放課後練習で生徒らは、本番の衣装と、音響や照明など舞台のセットを初使用。3年学年主任の池田完治教諭(56)の助言に合わせて、特設ステージの上で堂々と演じた。

男子生徒の自殺以降、同中は「命の教育」を実施。3年生は昨年度から、シェークスピアの悲劇を通して学習に取り組む。池田教諭は「町で起きた出来事を風化させないよう、今の中学生の心に響く方法で、命とは何か考える機会を与えたい。難しい内容だが、協力して練習に励む中で、相手を尊重する気持ちや、自分がかげがえのない存在

文化祭でシェークスピア披露へ



体育館の特設セットで、「オセロ」をアレンジした演目の練習に励む菊水中の生徒。和水町

であることを学べると思つ」と話す。

生徒たちは昨年度の3年生が演じた「ハムレット」に感動。「自分たちも演劇をしたい」と希望し、裏方を含め全49人が参加する。池田教諭がオセロの新訳版の書籍を複数読み込み、内容の本筋を変えずに90分に短縮した脚本を書いた。

6月末から練習を続け、大道具の大部分は生徒が自作。オセロ役の松浦弘宣さんは「演じる中で、うそやうわさにだまされず、信念を貫く大切さを学んだ。自分が表現したいことを納得のいく形で演じることができたのが楽しい」。妻役の岩下心愛さんは「元々人前で大声を出すのが苦手だったが、練習を重ねるごとに自分の成長を実感できた」と話した。

亡くなった男子生徒の家族は「命の教育の本質を忘れず、演劇を通して自分の命、相手の命、どちらも大切にすることを学んでほしい」と取り組みに期待した。

(岡本遼)